

名前の由来

| 中央区・城山支部 西田橋小田原病院 | 小田原 良治

知人が、自分の家系を調べて家系図を作っているという。最近、家系図づくりをする人が多いらしい。昔のような親戚付き合いがなくなると誰が親戚なのかわからなくなってくる。私たちが子供の頃は、親戚付き合いが多かった。催し物があるたびに、家に親戚が沢山集まって、お膳を出して、宴会があるものだった。祖父がその中心にいたが、そのたびに母は大忙しだった。酒の爛をするのは大変だ。鉄瓶の中に銚子（爛德利）を入れて、周囲を触りながら爛の加減をみるのは神業であった。我々子供たちは、放っておかれて、全く面白くない。こんな面倒なものはない方がいいと思ったものだ。いつの間にか、親戚の集まりは無くなり、祖父・祖母・父が亡くなると、誰がどのような親戚かわからなくなってしまった。それを考えると、誰かが、家系図を作り、親戚の関係性を書き残してくれるというのは有難いことである。

私は、4人兄弟の長男だった。弟が2人、妹1人である。弟妹がいたことや祖父母にとって初孫だったこともあろう、私は、祖父母と過ごす時間が多かった。祖父は、万世町（現南さつま市）の出身である。旧制川辺中学の出身で、当時、祖父は、兄とともに小田原兄弟と呼ばれていたそうである。祖父の兄は現東京大学医学部医学科を出て、祖父は現長崎大学医学部医学科の出身である。祖父の兄が乞われて町立病院の院長をしていたが、出身大学のある東京に移住する時に、町立病院の院長を祖父が引き継いだ。その後、祖父は町立病院を買い取り、大正3年、加世田市万世町で大崎医院を開業していた。父が旧制

二中に進学したのを機に、昭和10年、現在の鹿児島市山之口町に移転、転居して来た。私が生まれたのは、昭和22年であり、終戦後の何もなかった時代である。山之口町は焼夷弾で焼け野原だったらしい。上荒田に戦争で焼け残った家があったので、私は、そこで生まれた。その後は、現在地に、祖父が、医院と住居を作ったことから、生後ずっと山之口町で育っている。天文館で生まれてはいないが、天文館で産湯を使って育ったわけである。「鹿児島のシティーボーイ」ということだ。

祖父は、いろんなことをよく知っていた。酒の飲み方も祖父に教えてもらった。名前についても祖父から習ったことが多く、我々兄弟の共通認識になっている。「小田原」という姓は数が少ない。鹿児島県では、私の知る範囲では3系統しかない。当時の話ではあるが、祖父の出身である加世田と加治木、川内に小田原姓があった。先祖がつながっているか否かも定かではない。

「小田原」という名前は、鹿児島では「おだはら」と呼んでいた。私たちも小さいころは、周りから「おだはらさん」と呼ばれて、「はい」と返事をしていた。私が小学校何年生の時だったのだろうか、兄弟で祖父と話をしてる時に、名前の話になった。その時に、祖父が、「皆がおだはらと呼んでいるけど、本当は、我が家は、おだわらと読むのだ。関東の地名も、おだわらだ。」と教えてくれた。即座に、兄弟で、今日から正しい名前の「おだわら」にしようと思い決めて、父に正しい名前の「おだわら」に呼び名も統一しようと申し入れた。大げさに言えば、この時に、兄

弟で我が家の「アイデンティティ」を確立したのである。この時以来、「おだはら」と呼ばれれば、「おだわらです」と修正している。

おかしなものである。それまでは、「おだわら提灯」と囃されると傷ついたものだが、これ以来、全く気にならなくなった。

祖父の兄は東京で開業したため、私の祖父が小田原の本家を継いでいる。本家といっても大仰な家系図があるわけでもなし、大した家柄ではなかったのだろうが、子供の頃はそれなりに関心を持ったりしていた。家系図というものは、いつの時代か、だれかによって捏造されたものが多く、どこかで天皇家につながっている。家系などというのは、極めていい加減なものだが、家系も酒のつまみの話としては面白い。



津城跡地「藤堂高虎騎馬像」を訪ねる

我が家の家紋は「蔦」である。「蔦」の家紋は多いようだが、我が家の家紋は、「藤堂蔦」である。藤堂高虎の家紋である。藤堂高虎は豪勇で築城の名手として知られている。近江の出身で、豊臣秀吉の弟である「豊臣秀長」に仕え、九州征伐にも参加している。秀長死後、一時高野山に籠るが、後、秀吉の大名と

なる。藤堂軍は、水軍を擁しており、慶長の役（朝鮮征伐）時には、漆川梁海戦で朝鮮水軍を壊滅させたことで有名である。秀吉死後は、外様ながら徳川家康の側近となり、伊勢津藩 32 万 3,000 石の藩祖となった。

子供の頃の話ではあるが、家紋が示すように、我が家は藤堂高虎と関係があるらしい。藤堂と小田原とどうつながるのだろうかというのは子供心に気になるところであった。藤堂高虎は近江の出身である。小田原城は、北条氏の居城であり、秀吉の小田原城攻めで落城してからは、徳川家康の支配下にあった。藤堂と小田原城はつながりがなさそうである。実は、江戸に小田原町があった。現在も晴海通り、築地に小田原町交番として旧地名が残っている。関心を持つといろんなことに気づくものである。徳川幕府開府の時、江戸の地は大規模な開発が行われたが、その時に、真っ先に徳川家康に江戸屋敷を設けることを申し出たのが、伊達政宗と藤堂高虎であった。歴史は面白い。藤堂高虎に与えられた江戸屋敷は、江戸城桜田門にあった。ここまでは知っていたのであるが、実は、桜田門は、旧名は、小田原門だったというのがわかった。

やっと繋がった。この江戸城桜田門（小田原門）がルーツではなかろうか。藤堂高虎は、伊賀を治め、忍者を使っていたことでも知られている。また、藤堂高虎が治めていた伊勢の港である安濃津（津）は鹿児島島の坊津とともに有名な交易港であった。藤堂高虎は強力な水軍を持っていた。九州征伐のころは、藤堂高虎と小田原とは縁がなさそうである。江戸開府の頃に繋がる可能性が高い。さらに、藤堂高虎が「藤堂蔦」の家紋を用いたのは、人生の後半である。前半は酢漿草（かたばみ）紋を使用している。こうしてみると、小田原と藤堂蔦の繋がりは、藤堂高虎が伊勢津藩の城主になってからのようである。どうやら、江戸時代に交易か何かを通じて坊津経由で加世田の地にやって来たと考えるのが一番よさ

そうである。家紋を許されたところをみると何らかの一門衆だったのだろう。

何となくもっともらしい話にたどりついた。酒のつまみの話としては使えそうだなと悦にいていたのだが、ふと思い立って、「津城」を観に行くことにした。

名古屋から近鉄特急で、津駅まで行き、普通列車に乗り替えて、津新町駅に着いた。商店街を抜け、信号を左折、カトリック教会前を通り、市役所の横を抜けると立派な石垣があった。津城の石垣である。

「津城」に着いた。城郭のなかに入り、庭園を抜けると藤堂高虎の騎馬像があった。「やっと、着いたぞ」

木立に隠れて、お城は見えない。近くで落ち葉を掃き清めている人に尋ねた。

「お城を見に来たのですが、どう行けばいいですか」

「お城ですか～。お城はね～、ないのですよ。」

「え～」

「櫓、『角櫓』があるだけです。すぐ、その先です」

「あー」

やむを得ない、お願いして、藤堂高虎像とともに写真を撮った。

かくて、急に思い立ったルーツを訪ねる旅は終わった。



津城「角櫓」の秋

